世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

An Attempt to Improve the Physical Expression Class by Team Teaching : How to Effectively Inspire by Diversified Instructors

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-07-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 川上, 暁子, 加藤, 未来
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/202

身体表現の授業における
ティーム・ティーチングの導入

—授業者が複数いることの効果検討—

An Attempt to Improve the Physical Expression Class by Team Teaching
– How to Effectively Inspire by Diversified Instructors –

川　上　暁　子*
KAWAKAMI Akiko

加　藤　未　来†
KATO Miku

1．はじめに

本稿の身体表現という授業は、保育者養成課程のカリキュラムにおける「保育内容指導法（身体表現）」という正式名称である。幼稚園教育要領と保育指導指針における表現領域の内容を踏まえて、特に身体を使った表現に重点を置き実践を行うと共に、子どもを対象にした指導法について考察を深めることを目的としている。将来的に指導者となる受講者が、身体による表現力と発想力を養うべく、また現場で表現あそびや園内発表会に取り組むことを見据えて、身体表現の創作と発表を体験できるような授業内容で実施している。通年授業のため前期よりスタートしたが、平成26年度後期より大学からティーチング・アシスタント（以下、TA）を採用するための予算を得て、教員とTA1名の計2名の態勢によるティーム・ティーチング（以下、TT）で授業運営を行った。TA採用は当初、実技の授業としては受講者が多いため、授業に‘補助者’が必要という理由で考えた措置ではあった。だが、実技科目である本授業において、ダンスや身体表現の実践と創作活動の経験を有するTAが授業に関わることが、受講者の動きの質を高め表現力・発想力を向上させるなど、効果的に働くのではないかと期待された。また、教員とTAで行うミーティングにより、受講者の様子について考察を共有し、授業内容や授業方法について協議するなど、補助者としての位置づけには収まらない授業者としてのTAであり教員（T1）とTA（T2）という授業者が複数いることで可能となる授業の態勢が検討できた。

本稿の目的は、①受講者への授業アンケートを通したTTの授業効果の検討と、②TTによって

*武蔵野大学教職研究センター　†日本社会事業大学 兼任講師

可能となった授業内容と授業方法に関する考察を行うことにある。授業者の省察のためであり、授業改善の一環として本稿をまとめる。また、平成27年２月実施の武蔵野大学FD研修において発表した内容を、再検討・再構成したものである。

２．TTに関する先行研究の概観

TTは1950年代後半、アメリカ合衆国の小・中学校において打ち出され、学校組織や授業の改革を試みるために考えられた授業方式である[1]。ハーバード大学教育学大学院院長であったケペル（Keppel）が、1955年、年次報告の中で「それぞれ給与差のあるリーダーと教師と助手からなる“教師のティーム”」という構想を打ち出した[2]のが始まりとされている。教育内容の高度化と教育方法の多様化に伴い、リーダーの教師を中心として、何人かの教師たちが協力組織をつくり、それぞれの専門性や能力を生かし、必要に応じて学級を解体して協力しあい、授業にあたるという授業改革が盛んに試みられるようになっていた。加えて、開発当初のねらいとしては、階級制の導入によって優秀な教員の産業界への転出を防ごうとしたこと、また教員不足の解消を行うことなども挙げられる[3]。TTという言葉を最初に用いた論文は、“International of Religious Education”の1957年３月号掲載のフォスター（Foster. E.）の“Teaching by Teams”であるという[4]。日本に紹介されたのは1962年頃であり、一部の小学校で実践が始まり、1968年小学校学習指導要領が改訂された際に、「指導の効率を高める為、教師の特性を生かすとともに、教師の協力的な指導を工夫すること」が明示され、より多くの現場で実践されるようになった[5]。アメリカでは学校組織の改革を主な目的としたが、日本でのTTは、学習指導における教育効果の向上と能率の増進をめざした「授業改造」[6]を主眼としてスタートした。しかし、1970年代から1980年代には、日本では財政的な面から教員定数の増加が困難だったために、一時的な普及に留まり、TTの実践は減少した。その後、1990年代に文部省（現：文部科学省）によって「個に応じた多様な教育」を推進するとして、TTなどの新しい指導方法を積極的に実施できるような教職員配置への改善が促されるようになると、日本全国の教育現場で盛んにTTが導入されるようになった[7]。また、2000年代になると、小・中学校で「個に応じた多様な教育」の実現を目指し、新教育課程が完全実施されたことも、TTによる授業を推進しており、近年では、目的に合わせた様々なTTが実践されている[8]。

続いて、身体や運動を扱う授業として、体育科におけるTTの実践についてまとめる。体育科は年代によりその授業のねらいや内容を変化させてきているが、特に1990年代から小学校体育研究会などにおいて、運動の楽しさや喜びを味わうことに加えて、個に応じた指導に向けての関心が高まった。子ども自身が自分に合った課題を見つけ、自ら考えたり工夫したりしながら意欲的に学習を進めている手ごたえを持てるような、個に応じた指導と学習環境の実現が必要だと考えられるようになった。こうした教育現場での実情を背景に、授業実践においてTTは効果的だと捉えられ、体育科の授業において教員側の指導効率を高めるのはもちろん、子どもの自発的な動機を促進することや、子どもたちが多くの教師のパーソナリティーや雰囲気に触れることにも期待が持たれた。池田・釼持（1988）[9]は体育科のTTにおける教員の役割分担を以下のように分類して述べている。本授業も身体の運動を扱う実技授業であり、Ⅰ～Ⅳのように示されるTT

の分類は省察のために踏まえることが欠かせないと考えられ、以下に引用しておく。[　] 内に各項目の要点をまとめて記述する。

Ⅰ　習熟度（技別）に応じた役割分担によるTT
［器械運動や水泳など、技の難易度の違いなどに対応する必要のある場合］

Ⅱ　場所ごとの役割分担によるTT
［器械運動や水泳、陸上競技など、技によって練習する場所を分ける必要のある教材の場合のTT］

Ⅲ　学習課題に応じた役割分担によるTT
［子ども一人ひとり、グループ一つひとつのめあてに対応する必要のあるTT］

Ⅳ　意欲や学び方に応じた役割分担によるTT
［グループ学習の場合など、グループごとの運動の意欲や取組みの程度に合わせて対応する必要のあるTT］

さらに、本研究に関連した内容の研究として、体育科の表現領域のダンス授業におけるTTについて調査研究が行われている。高橋ら（2015）による『学校体育活動（ダンス）における複数の指導者による効果的な指導の在り方調査研究（中間報告）』である。小・中学校の体育における教員と外部から招へいした芸術家等とのTT実践の効果検討が進んでいる。また、小・中の教員養成課程のダンス授業におけるTTの取組みに関する実践記録『和と輪を求めるダンス授業―ティーム・ティーチング導入の試み』（松尾、1999）も挙げる。特にフォークダンスやストリートダンスにおいて、習熟度と学習課題に応じて教員が役割を分担する効果を論じると共に、創作ダンスのような、個々人の感性やイメージから即興的に動きを発見していくような授業における、TT活用の問題点と利点について述べられている。

TTの先行研究としては、アメリカで生み出された背景や日本での導入期から発展期へと年代ごとの変遷をまとめた内容、体育科だけでなく理科などの他教科においても、教科特性と授業実践に基づき教員の役割分担の分類・展開をまとめた内容が多く散見された。以上を踏まえて、本稿の独自性を挙げるならば、特に保育者養成課程における身体の表現を扱う授業実践であることと、授業担当教員と招へいした外部の表現領域の教員によるTTであることを挙げる。

3．授業実態

【「保育内容指導法（身体表現）」の授業概要】

- 保育士・幼稚園教諭のための選択必修科目
- 通年科目（32コマ）
- 受講者　武蔵野大学　教育学部
  児童教育学科　保幼専修・初等専修2年生
- 受講者数　125名（内 女子112名・男子13名）
- 3クラス編成　火曜＝初等クラス　30名
  水曜＝保幼1/2クラス　42名
  金曜＝保幼2/2クラス　53名

幼稚園教諭免許・保育士登録資格の取得のために設置された本授業において、受講者自らが身体を動かして、身体感覚を高めることはもちろん、子どもの表現活動を指導・援助するために自身が身体で表現する経験を深めることも目的として挙げる。また、身体を通して感じたり、想像したりしたことを、身体の動きによって表す過程において、どのような指導技術と言葉かけが必要なのか、受講者が

考察することも重要と考える。これらのことを踏まえて、各回の授業内容を表1のように示す。

前期は特に、子どもと一緒に行える身体を使った表現遊びの体験や、動きの基本要素を体得する内容を重視して構成した。また前期授業のまとめとして、表現遊びの体験で行った内容や動きの基本要素を踏まえて、子ども向けの歌謡曲への振付を行い、グループごとに授業内の発表をした。TTを導入した後期は、音楽や言葉から即興的に表現することを体験し、また、身体の形によるポーズを使った表現あそびから動きをつなげることへと発展させていく内容に取り組んだ。さらに後期の最後には、通年授業のまとめとして、身体の表現による作品をグループで創作し、舞台発表まで行うというカリキュラムで実施した。

表１：授業回ごとの授業内容

前期		後期	
授業回数	授業内容	授業回数	授業内容
1	ガイダンス	17	ガイダンス
2	実技テスト課題の発表	18	創作の練習①
3	実技テスト課題の練習	19	創作の練習②
4	歌に合わせて動く	20	創作の練習③
5	動きの種類を知る	21	グループ創作
6	運動課題とイメージ課題	22	グループ創作
7	表現あそび：ポーズ	23	グループ創作
8	表現あそび：まねっこ	24	グループ創作
9	表現あそび：動きのリレー	25	グループ創作
10	実技テスト	26	グループ創作
11	子ども向け歌唱への振付	27	グループ創作
12	子ども向け歌唱への振付	28	グループ創作
13	子ども向け歌唱への振付	29	グループ創作
14	子ども向け歌唱への振付	30	グループ創作
15	振付発表	31	発表練習
16	授業のまとめ	32	発表練習
		授業外	表現発表会

４．T2 である TA について

TA採用にあたり、身体を使った表現を扱う本授業において、正確に動きの要素を動き分けられることや、大きく身体を動かすための見本となれること、即興的に多様な動きを生み出せることが条件であった。身体を大きく動かし表現を行う授業者が複数いることが刺激となり、学生の動きの質を高め表現力・発想力が向上することが期待された。作品創作・舞台上演の経験を持つ教員とTAが協力して授業運営することで、学生の創作グループ（計16グループ）に対してきめ細かい指導と助言を行える指導態勢になることが期待された。

実際に採用したTAについては、①クラシックバレエや日舞などの経験者　（10年以上）である。

②ダンス作品を創作したことがあり、それを舞台発表をしたことがある。③身体表現の授業を大学・短大などで担当し指導したことがある。採用したTAの人数は2名であり、1クラスに1名ずつの配当とした。

５．TT の効果検討

受講者への授業アンケートを授業の32コマ目が終わった時点で行い、有効回答数117を得た。アンケートの内容は、Ⅰ：受講者自身、Ⅱ：T1（教員）、Ⅲ：T2（TA）、Ⅳ：授業の各カテゴリーについて各4～5つの質問項目で作成し、回答方法は5件法（1：まったく感じない～5：非常に感じる）である。また､T2（TA）と「具体的にどのように関わりがあったか｣､授業について「良かった点」「改善点」を自由に記述するよう求めた。回収後、受講クラスと創作グループの属性が分かるように通し番号を付け分析を行った。この受講者アンケートの結果と、T1による授業計画や実施の記録、授業期間後に行ったT1とT2による振返りの協議を基に、TTによる授業運営の効果を検討した。

５－１　授業内容と授業方法

後期の17回目よりT2が入ったことにより、授業内容を複数人で協議することが可能となった。まず、1年前の受講者による作品VTRを鑑賞し、T2の感想･意見を求めた。その機会がT1にとって授業内容の客観的な見直しにつながり、創作の初期段階に各創作グループが作品のコンセプト（誰に何を伝えるか）を考えるための時間を加えるに至った（授業回22）。さらに、授業の前後に創作の進度や受講者の様子などをT1・T2の間で意見を交わす時間を設けたが、T1だけでは知りえないグループ内の人間関係や創作の行き詰まりなど、受講者について情報を集めることができた。また、協議において授業の運営方法、特にT1・T2の教室内における配置で適したパターンを考え、授業を行うことも可能となった。

T1・T2の配置の実際として、図1のパターン1～6を挙げる。パターン1ではT1とT2が受講者の前に立ち、交互に教授するパターンである。パターン2は、T1が授業のリーダーシップを取り、T2は受講者の背後に立ち全体を観察し必要があれば援助に出られるようにするもの。パターン3はT1が受講者の前に立ち教授を行う際に､T2が受講者の中に交じって動くというもの｡パターン4はT1、T2で受講者を半分ずつ受け持つというパターンである。パターン1～4　は授業回18～20の「創作の練習」として創作の手法を体験する授業内容で主に実施した。先述のようにT1・T2の協議によって授業前に配置パターンを想定しその通りに実施した場合と、クラス全体と受講者の授業中の様子によって変更する場合もあった。さらにパターン5・6は、グループ創作の時期に特に行った方法で、T1またはT2と受講者の数名が一緒に動く様子を、他の受講者が観察するというもの。その場で一緒に受講者の中に入って主にT2が動くことによって、受講者の身体の動かし方やアイディアを発想することへの促進力となったと考える（自由記述233・278など)。このように授業者が複数いることで、教員の配置パターンが多様になり状況次第で活用するパターンを選ぶことができた。またパターンの中でも特に3・5では、授業者が教授するという一方的な指導ではなく、受講者集団の中に授業者（特にT2）が同化する方法なので、

共に授業者が活動を行っているような感覚を受講者が持つことになったと考える（自由記述351）。

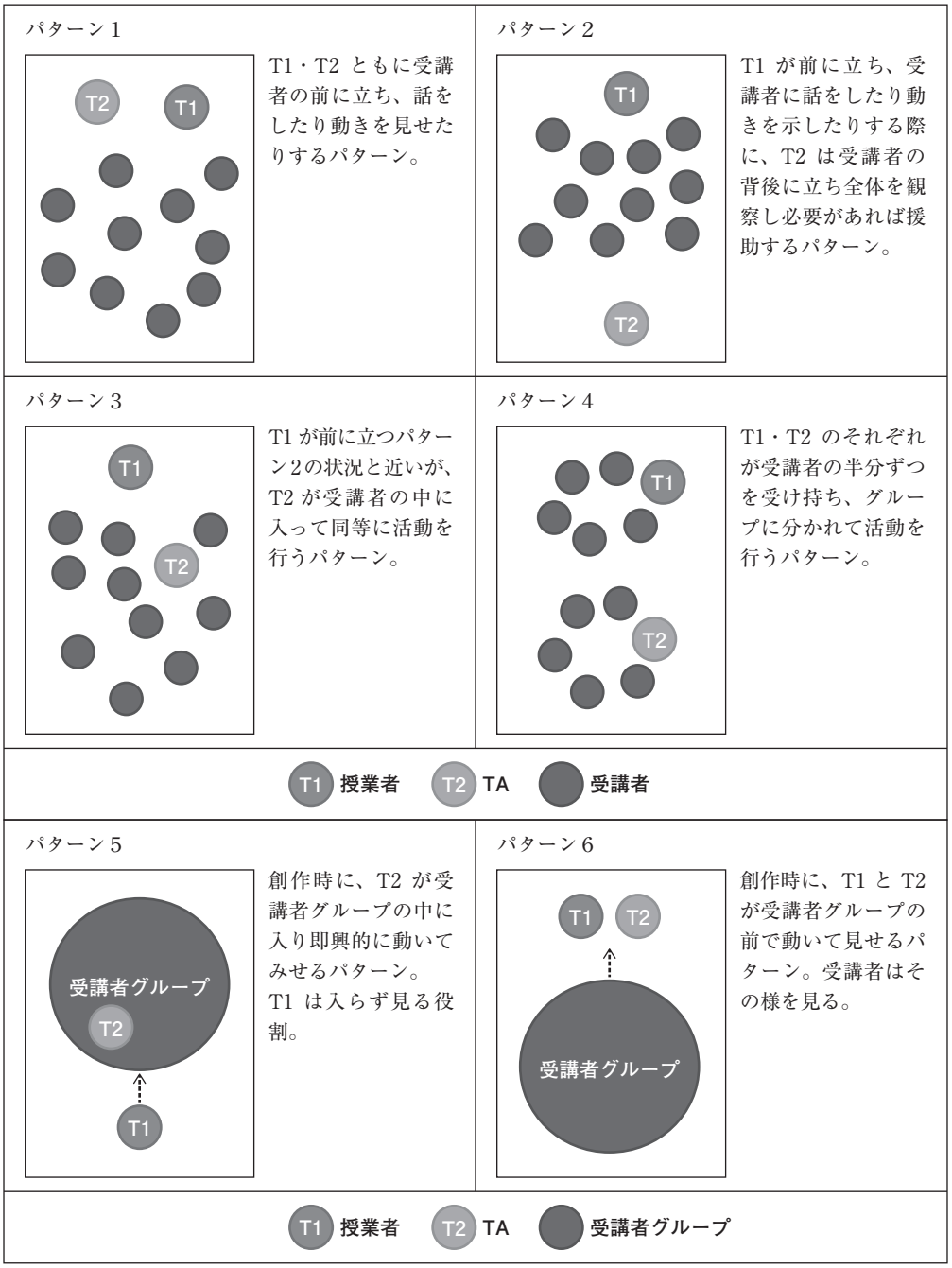

図１：授業における T1・T2 の配置

自由記述　抜粋①

147　作品のテーマが決まらないとき、ダンスの動きが決まらないとき、（TAが）いつも近くで見てくれて、アドバイスを下さった。
149　TAの先生も踊りを見てくれたり、アドバイスをくれたため、むだなく練習をすることができた。
233　自分では考えつかない体の動きのレパートリーが増えました。体で表現することの難しさや楽しさを学びました。
263　TAの先生から話しかけてくださったり、グループの作品についてのアドバイスをわかりやすく的確にくださってとても楽しく関われた。
278　TAの先生自身が一緒に身体を動かしながら、アイディアをくださったり、一緒に考えてくださり、私たちも活動をしやすかったです。
311　先生が二人いたため、アドバイスをもらいやすくて良かったです。
312　グループでの話し合いで、困ったり話が止まったりしたときに、（TAが）タイミングよく来てくれて、なんとなくアドバイスをしてくれて、そこから自分たちで考えるような機会を与えてくれた。
334　正解のないものを求めていく中で、一人だけでなく複数の専門家の意見を聞けたことが良かった。学生からの意見をつぶさず尊重してくれていた。
351　先生も一緒に楽しんでいる雰囲気があり、一体感がありました。
395　（TAが）関わりやすく向こうからも来てくれるので私たちも接しやすく有難かったです。
372　学生と先生との距離感が良かった。
405　TAの先生がいたことによって先生からのアドバイスもたくさん聞けて良かったです。

５－２　授業者と受講者との関わり

TTの効果として、授業者と受講者の関わりを多く持てたことをさらに挙げる。受講者アンケートのT1（教員）とT2（TA）に関する項目で、教員との関わり・説明の分かりやすさ・授業への熱意・参加の促し方について聞いた。図２のⅡ-1より、T1との関わりを受講者の多くが持ったことが分かる。さらにT2との関わりについては、自由記述の内容を読み取ると、「アドバイスをくれた」と72名が記述しており、その記述者の属性を調べたところ、全創作グループに及ぶことが分かった。個々のグループにT2の方から赴くことで、創作グループに指導と助言を行き届かせることができたのではないか（自由記述147・263・395）。また、授業者の複数人が教室内を巡回することで、受講者は質問を必要なタイミングで行うことができたようだ。（自由記述149・311・312）この授業者の受講者への関わり方を「距離感が良かった」という言葉で評価する記述（372）があり、先に述べたT1・T2の配置パターンを適切に活用できた成果でもあるだろう。

関連して、説明が分かりやすいか評価した項目でT2の方がT1よりも高い数値であった点が興味深い。T1は授業への熱意について高い数値を得たが、反面、説明の分かりやすさについては数値が下がり、この結果から受講者はT1とは多く関わり、その熱意は伝わるが実質的な説明は理解しにくいという評価になることが分かる。この点で、T2に関して「説明が分かりやすかった」とT1よりもT2に上位の回答をしている者が117人中30人（逆にT2よりもT1は16人）であった。T1が全体に向けての説明を主に担い、グループごとの指導においてもT1がまずは行うようにしていたが、T1の説明が分からなかった場合、T2に聞けば分かるという状況や、T2にも聞いた上でT1とT2の分かりやすい方を受講者が選択するという状況が可能だったのではないかと推察できる（自由記述405）。また授業期間後の協議で話された、T1とT2の役割分担について、T1が

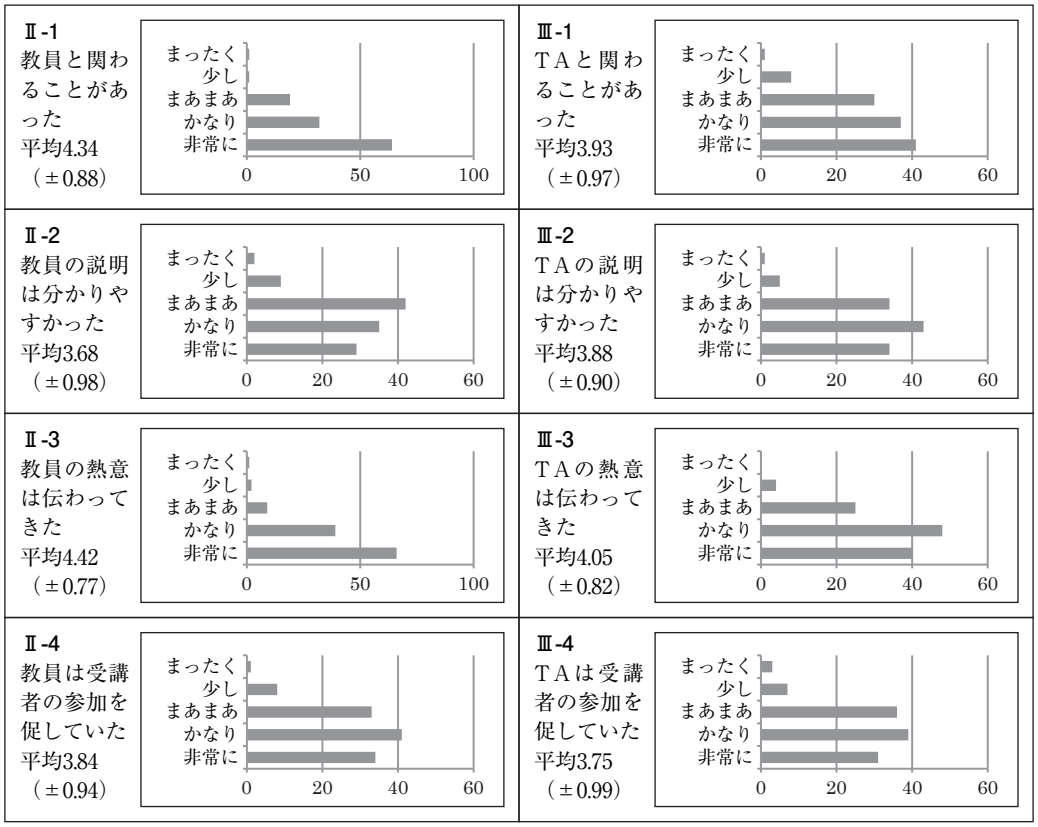

図２：T1 または T2 に関する評価結果

考えやイメージを受講者に伝達する時にT2が補足や解説などを担ったという授業者らの認識とも合致すると考える。

６．おわりに

TTという授業者が複数いることの効果を検討した時、本稿で述べられることは、①T1とT2の間で実施した協議により、授業内容の見直しと改善ができたこと。②受講者の様子や態度を複数人で観察し共有するため、受講者の授業に対する意欲や姿勢が把握しやすくなったこと。③授業方法では、T1とT2の配置パターンがいくつか考えられ、受講者の様子や授業内容によって使い分けることが可能となったこと。④受講者が授業者との関わりを多く持ったことから、創作グループへの細かい指導が実現できたことである。アンケートでTTが効果的だったか聞いた項目で、平均値4.0±0.96という結果だったので、TTによる授業運営を受講者も概ね評価したと言える。T2という授業の‘補助者’が加わるのではなく、T1とT2という複数の専門家による授業だと評価する自由記述（334）があったことは､TTの効果を受講者も感じていたと考える。そして、身体で表現したり発想したりする体験になったことや、同時に表現する難しさも感じたこと、子

どもとの活動を思い描けたことなどの記述（222・253・270・275・322）から、本授業の目的を達成した受講者がいたと読み取る。さらにTTの効果と直結して言うことはできないが、受講者の表現活動に対する既成の考えを広げる授業にもなった（自由記述224・314・382）。

今後のTTによる授業運営の課題として、授業内容の方向性の共有と、授業の計画と実際とのズレが生じた時の内容修正または調整のために、T1とT2の協議を密に行うことが欠かせないだろう。授業内でのTlとT2の役割分担や、配置の取り方など、互いに臨機応変に対応するためにも、授業前後に時間の許す限り必要である。さらに、T1における課題として、T2に任せられない状況（例えば、受講者間の争いや、受講者から出た授業の方向性の根幹に関わることへの質問対応など）や、任せられない受講者（例えば、授業参加に対してかなり消極的である者、授業参加の態度が度を越して相応しくない者など）の見極めを行うタイミングに関して挙げる。T1が責任を持ち対応することが必要となる状況や受講者について見極めが遅いと、その日の授業全体に影響が出ることや、授業計画も変更しなければならない可能性があるため、T2と共有を図った上での適時の善処が望ましい。そういう意味でも、T2との授業への振返りや受講者の様子に関する情報共有をTlが積極的に行うことが必要である。

最後に、今回のアンケート調査で、「昨年度の発表会を見て」という履修の理由が93名で一番多く、一年前は観客だった受講者らにとって、自分も身体表現の作品を創り舞台発表したいという期待が高かったことを知った。また、授業に対する「良かった」という自由記述の内容を読み取ると、グループワークの「達成感」や「一体感」があったこと、「チーム」での役割分担や「メンバー」の個性に関する記述が目立ち、創作における協同作業を経験できたことが受講者の授業を評価する点であることが読み取れた。アンケートの「この授業は全体として満足できる内容だったか」において「5：非常に感じる」との回答が117名中58名、平均値4.34と標準偏差±0.8という結果から、授業への期待にはひとまず応えることができたと考える。しかし今後も、授業者には実践と省察の繰り返しが求められるだろう。保育現場との研究を進め、表現活動における保育者としての指導力・実践力とは何か、養成課程における授業を深めていきたい。

自由記述　抜粋②

222　身体を動かすことの楽しさや大切さを強く感じた。子どもたちにそれらをしっかりと伝えられる保育士になりたいと思ったし、伝えられる技術を少しは学べたこと。

224　自分が思っていた「体で表現する」をはるかに上回る表現力で、体でここまで楽しんだり、表現できるのかととても感心した。

253　自分を体で表現し、相手に伝えることの難しさを知り、どのようにすれば伝わるかなど、“先生”になる上で大切なことを学ぶことができたこと。

270　言葉や物を使わずに自分の体だけでいろいろな表現の仕方を学んだ。

275　体を使った子どもとの関わりを学ぶことができたこと、また、協力して何かを作りあげるという達成感の味わえる活動ができたこと。

314　自分が思っている以上の表現をしないと伝わらないことが分かった。

322　保育に関わる仕事を目指す者として、子どもに教えられるように必要な技能・知識を身に付けられる授業だったこと。

382　日常生活では使わないような体の動きがあって、体をしっかり動かしたという感覚があったし、いろいろな表現の仕方があるということを学べました。

引用文献

1　藤井洋武「大学体育における外部講師を招いた授業についての一考察―ヨガを体験した学習者の感想文を手がかりに―」『川崎市立看護短期大学紀要』18刊１号　2013　p.22
2　池田猪佐巳『小・中学校における体育保健のティーム・ティーチング』黎明書房　1972　p.43
3　前掲書（2）　p.22
4　前掲書（1）　p.44
5　刈谷三郎　宮本隆信「体育の授業におけるティーム・ティーチング―第５報―ティームの編成を中心に」『高知大学教育学部研究報告第１部』通号53号　1997　p.123
6　前掲書（2）　p.51
7　前掲書（1）　p.22
8　前掲書（1）　p.22
9　池田延行 釼持勉『体育科の特性を生かすティーム・ティーチング』明治図書出版株式会社　1988　p.8

参考文献

佐藤静一　坂田昭裕「ティーム・ティーチング（TA）の形態と複数（担任・加配）教師のP-M指導類型が学校モラール及び学力成就値に及ぼす効果」『熊本大学教育学部紀要　人文科学』第47号　1998　p.245-260

松尾千秋　東原芳美「輪と和を求めるダンス授業―ティーム・ティーチング導入への試み―」『女子体育』41（3）　1999　p.46-51

吉田香奈　木下真　沖裕貴「ティーチング・アシスタント（TA）の活用と教育的効果に関する教員の意識―山口大学教員調査（2005）より―」『大学教育』第３号　2006　p.69-86

渡邊淳　松井誠一郎「学生TAの役割の検討―小学校「総合的な学習の時間」におけるビオトープ活動に参加して―」『宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要』第30号　2007　p.491-500

三崎陸「学習者に対する共感的理解に基づいたティーム・ティーチングに関する事例研究」『日本学校教育学会創立20周年記念論文集学校教育の「理論知」と「実践知」』2008　p.261-275

雁野重之　尾沼玄也「実験室におけるティーチングアシスタントの役割に関するビデオ撮影を用いた調査」『日本教育工学会論文誌』33刊　2009　p.81-84

山田悠莉　妹尾美智子　鳥居恵治　大岩みちの　佐善圭　岸本美紀　水谷誠孝「保育内容を実銭に生かす取り組みとしての幼児教育祭3―効果的なチーム・ティーチングを行うために―」『岡崎短期大学研究紀要』44号　2011　p.35-42

高橋るみ子ら「学校体育活動（ダンス）における複数の指導者による効果的な指導の在り方調査研究（中間報告）」『宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要』第23号　2015　p.91-105

筒井洋一・山本以和子・大木誠一編『CT（授業協力者）と共に創る劇場型授業』東信堂　2015

参考資料

表２：平成26年度グループ創作作品の概要

通し番号	グループ名	作品名	人数	小道具	作品概要
1	UMI	Uniqe Marine Inspiration	9	白い布・カラフルな布・ビーチボール・浮き輪	前半、浮き輪やビーチボールを用いて、海に遊びにきた子どもたちの楽しそうな様子を表現。海に飛び込み、後半はカラフルな布を用いて、群れをなす魚やクラゲなど、海の中の生き物を神秘的に優雅に表現した。
2	せんとう－ないん	Fighting ママ	8	バッグ	スーツ姿のお母さん達がテキパキと仕事をこなす様子から、後半はジャケットを脱ぎ、エプロンを着て、忙しく家事をこなす様子が表現される。家事と仕事を両立するため奮闘するお母さん達に捧げられた応援歌のような作品。
3	ぷぴちょの集い	チクチク　チョキチョキ　くるくる　…ポン！	7	カラフルな小さな布・白い布	小人たちが、いろいろな布を切ったり塗ったりして、１つの大きな服を作る様子を、ミニマムな動きと小道具である布や衣装を工夫して表現。

4	チームあいちゃん	オバケってこわい？	8	黒い大きなごみ袋	つなぎ合わせた黒い大きなゴミ袋が地をはったり、背を高くしたりと不気味な雰囲気。白い小さなオバケたちが現れ、愉快に楽しんでいる様子が繰り広げられる。
5	はむちゃんず	8人姉妹の夜の大騒ぎ！	9	くまのぬいぐるみ・ぴこぴこハンマー・まくら	８人の姉妹がパジャマを着て眠っているが、寝相の悪さからぶつかってケンカになる。「剣の舞」の音楽に合わせて、パワフルに怒りという感情を表現。
6	漢組	SAMURAI	9	木刀	出演者全員が男性の作品。全員が法被を羽織り、木刀を持って踊る。刀を振ったり大きくジャンプしたりとダイナミックに日本男子をテーマに侍を表現。
7	フレッシュ！スポーツ！	Let's enjoy sports	6	ボクシンググローブ	野球、サッカー、テニス、バレーボール、ボクシング、バスケットボールの試合をシーンごとに展開。それぞれのコスチュームを着て、爽やかにスポーツの楽しさと辛さを表現。
8	ガールズバンド	なりきり楽器	8	無し	打楽器、管楽器、弦楽器の役に分かれ、それぞれの音質を動きで表現。作品の最後は全ての楽器の音が組み合わさってアンサンブルになる様を表現。
9	チーム小学生	仲間たちの大運動会	7	ゴールテープ縄	選手宣誓から始まり、徒競走、応援、組み体操、綱引きとシーンを展開して運動会を表現。それぞれの競技の勝敗の行方をコミカルに表し、ダイナミックなダンスシーンを交えて構成した。
10	劇団ゆき	あなたと私のエアポート	10	キャスターかばん2個・まくら、傘、ぬいぐるみ、ドライヤー、シャンプーハット、ハンガー、パジャマ、帽子	シックな衣装と効果音で、舞台上はヨーロッパの空港かと思わせる始まり方。空港内でトランクの取り違いが起きる。解決するべく旅行者が奮闘、後半はトランクに入っていた小道具を持って、楽しい旅行風景を表現。
11	とっとこすぎ太郎	鏡～乙女の一日～	7	リュック、鏡	同じ服装をしたペア（トリオ）が３組。女の子の一日を、女の子と、鏡に映るその女の子の役に分かれ、リズミカルなダンスで表現した。
12	5060よろこんで！	桃ノ乱	9	金棒・刀	昔話「桃太郎」を基に現代的なダンス作品に仕上げた。元気に桃太郎たちが踊り、「鬼のパンツ」に合わせて鬼たちも楽しそうに踊る。
13	エコレンジャー	ゴミ星人をやっつけろ！！	6	ゴミ箱・ペットボトルや空き缶などのゴミ	舞台上に投げ込まれる空き缶やペットボトル。犯人は、黒い服を着たゴミ星人。エコレンジャーがペットボトルをワイシャツにするなどのシーンも取り入れ、ダンス作品でリサイクルを訴えた。
14	平成ねずみ小僧	○○中はお静かに。	7	お宝	ピンクパンサーの音楽に合わせて、黒い衣装・手ぬぐいを巻いた泥棒たちが宝を盗もうとしている。音楽中に、くしゃみやおならなどの身体の効果音を組み込み、宝を盗むまでをコミカルに表現。
15	Shall we ☆ dance	まほうのクレヨン	7	無し	絵本『くれよんのくろくん』を基に、箱の中で眠っていたクレヨンが魔法で目覚め、元気に踊る。途中、黒のクレヨンが仲間はずれのように感じるが、最後は皆仲良しになり、箱へと戻っていくまでを、色ごとに個性的に演じた。
16	KONOYO NO OWARI	泣いた赤鬼 ～ stand by me ～	8	草・手紙・金棒	日本昔ばなし「泣いた赤鬼」をダンスと身体の動きで表現した。赤鬼・青鬼・村人達をリズミカルに、かつアクロバットに演じた。言葉に依らないでストーリーを展開するために、演出も工夫。